

ひとつの夏が終わった。

国連の安保理改革を目指し熱く燃えた外交戦は、妥協点を見出せず、水入りとなった。日本の常任理事国入りも、とりあえずは先送りである。

先月、創設六十周年を記念し、約百七十カ国の首脳がニューヨークの国連本部に集まって開かれた「世界サミット」。紆余曲折を経て、「成果文書」が採択されたが、開発や軍縮などの中身は後退を余儀なくされた。国連にロマンを抱く人々には大きな失望感が広がった。加盟国の利害がひしめき合い、組織も肥大化したこの国際機構をシニカルに見る向きからは、「それみたことか」という声が聞こえてこなくもない。

しかし、そのどちらも正しくはない。国連を見るときは、どこにも増して「クールな頭」と「温かなハート」が求められる。なぜなら、国連は、崇高な価値や原則の体系であるとともに、高度な政治的機関であり、また、国益追求の手段になる一方、国際公的利益を広げ、実践していくための最も普遍的なプラットフォームという役割も持つからである。

安保理改革は、国連システムの意思決定メカニズムの中枢にメスを入れるもので、いわばゲームのルールを根本から変えようとする

常任理事国入りを目指す日本

試みである。長い間「タブー」とさえ考えられていた聖域に斬り込む改革に激しい抵抗や利害対立がないわけがない。

だが、改革は機構が時代の変化に適応し、機構としての正当性と有効性を高めていくためには本来、不可欠な作業といえる。

今年、日本がドイツ、インド、ブラジルと「G4」を組んで提案した安保理拡大の枠組み決議案が廃案になったことで、これを日本外交の挫折や失敗だと断じることは容易だが、この難しさからいえば、「よくぞここまで」というのが率直な感想である。

第二次世界大戦の末期、日本がまだ連合国と交戦状態にあった最中に設立された国連にあって、日

それが、一転、終戦後に「平和愛好国」となって国連に加盟し、いまや国連の集団安全保障システムに財政の側面と、文民や自衛隊による人的側面の両方なくてはならない役割を果たす国になっている。

しかも、日本がイニシアチブをとる安全保障は、国家のそれのみにとどまらず、人間一人ひとりの安全やコミュニティの発展に寄与する「人間の安全保障」を含み、さらに、アプローチとしても軍事的なものばかりではなく経済・社会分野の手段をも活用する包括的なものである。その意味で、小泉総理が総会演説で「優しさのある国連」「強い国連」「効果的な国連」をキーワードに描いた国連の未来像はパラノシアが取れている。

中国の反対は、日本が常任理事国になっても米国票が二票に増えるだけ、という誤った認識を反映している。

第三は、「コンセンサス（総意を重視する）・グループ」という偽善的な名の下、ライバル国の常任理事国入りを妨害することで結束した国々（イタリア、パキスタン、メキシコ、韓国など）による非建設的な横やり。中国は、この動きを水面下で盛り立てていた。そして第四に、五十三票の大票田として、もしも団結し、G4と提携すれば常任・非常任のポストを十分に手にする道が開けたものを、拒否権の保持という非現実的な要望に頑なにこだわったアフリカ諸国の自滅である。

今回の外交戦で最も明らかにな

品格失わず、潔い振る舞いを

本は「敵国」としてスタートしている。したがって、日本の常任理事国入りは、ゼロからどこるかマイナスから出発したことになる。

他方で、創設から六十年を経た国連において、日本が常任理事国の資格を持つほどの国にまで発展したことは、国連の成功の証でもある。

そもそも国連は、侵略国が出現し、国際の平和と安全を脅かすような事態が発生したならば、国際社会が一丸となって侵略国を撃退すること―これが「集団安全保障」の基本的な考え方を想定して作られた機構である。したがって、かつての日本は、まさに集団安全保障システムによって排除されるべき存在だった。

2005年の安保理改革を「失敗」させた要因があったとしたならば、それは次の四つが大きい。

第一は、米国の消極姿勢。米国は、日本を含む二カ国程度の常任理事国拡大は飲む用意はあっても、常任・非常任をあわせて十議席増やすG4の枠組み決議案には実効性を理由に反対した。そこには、「米国中心主義」が見え隠れする。

第二は、既得権（それも一九七二年に中華民国から代表権が北京に移ったことではいわずに棚ボタ式に手に入れた地位）を最大限に活用し、なりふり構わず日本の常任理事国入りを阻止するネガティブ・キャンペーンを展開した中国の動

ったのは、それぞれの国の「柄」である。日本は敗北主義に浸る必要は全くない。他方、安保理改革は日本単独で動かせるものでもないことから、機運を維持するためにも、G4の連帯を強め、米國との調整や中国との対話を進め、途上国（特にアフリカ諸国）との提携を深めることが当面求められよう。

あとは、これまでと同様、品格を保ち、あくまでも潔く振る舞うことである。腹いせに国連分担金を渋っている―などを見られないことも大切である。

（ほしの・としや）大阪大学大学院教授、専門は国際政治・国際安全保障論

文化

